

奨励賞

めぐる季節

長田町 中田 貴美恵

焙じ茶の香り立ちたる大振り湯呑み持つ手の温まりゆく
糖分を控ふる夫にありたけの水仙を活くバレンタインに
梅の実にかかる滴の傘に落つ奏づることく身にこちよし
花瓶より伸びる菜の花はみ出して光に向かふ強さを思ふ
耳澄まし夫の寝息を確かめて月を望みつつ息深く吸ふ

純直かつ優しい言葉遣いで日常の中の心の揺らぎを表現している。一首目は助詞「の」を重ねていき、嗅覚から皮膚感覚へと移っていく。その様を素直に表現しているだけなのだが、香りと温もりが読む者に静かに伝わってくる。二首目は初句と結句の具体性が効いている。五首目とともに夫への愛情の深さが伝わる。三・四首目に見るみずみずしい感性。「こちよし」と心情をはつきりと述べても、押しつけがましくならないのが中田さんの作品の特徴のひとつである。作者の人柄にもよるのだろうが、技巧を凝らさず平明な言葉による調べの良さからくるものでもあるだろう。六六号でも奨励賞を受賞している。